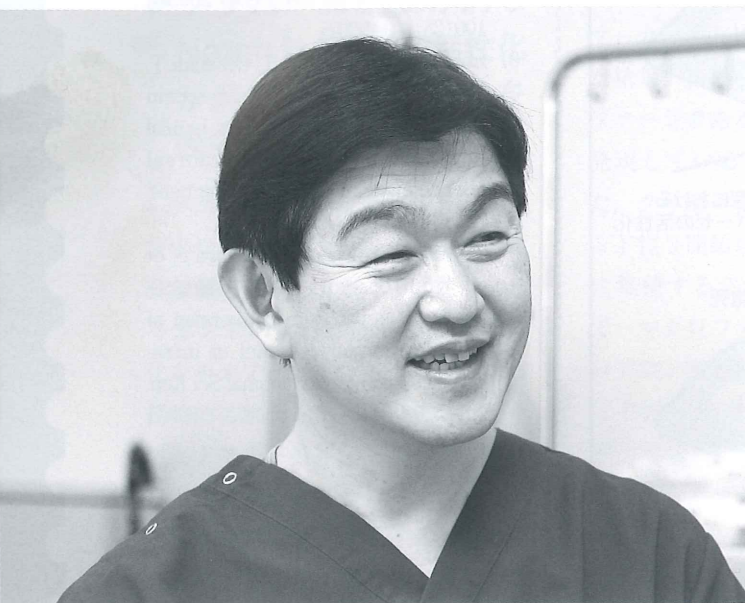




順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室における肝細胞癌治療の取り組み 群を抜いた治療実績と世界最高水準の設備をベースにした 確実・安全な RFA により 原発性・転移性肝癌患者の長期生存をめざす



Interview

椎名 秀一朗 先生

順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室 教授

順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室の歴史は、肝胆膵領域および血管造影を専門とする名誉教授・有山襄先生が教授を務めていた画像診断教室に始まる。2012年12月に椎名秀一朗先生が教授に就任したことをきっかけに、教室名に“治療”という言葉が加わり現在の名称になった。以前から肝胆膵領域の診療と研究に実績のある教室であったが、椎名教授の就任以降はさらにバージョンアップし、特に原発性・転移性肝癌のラジオ波焼灼術(RFA)の分野で大きな実績を上げ、2013年度以降肝癌に対するRFA実施数は国内トップを走っている。その治療の実際と今後の展望について椎名教授にお話を伺った。

順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室の概要

1. 診療体制

順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室は、現在(2017年7月時点)、消化器疾患の外来および入院診療を消化器内科と一緒にやっている。主に肝胆膵の診断と非外科的低侵襲治療を担当しているが、肝胆膵疾患の症例数は全国でも有数で、最新の画像診断法を用いて体系的・合理的に診断し、肝胆膵外科とも連携しながら

治療を実践。なかでも原発性・転移性肝癌に対するRFAは群を抜いた治療実績を誇っている。また、多発・再発のケースには肝動脈化学塞栓術(TACE)や肝動注化学療法(TAI)が選択されることも多いため、最近と同領域で活躍する第一人者も迎え入れ、「多くの肝癌患者さんをフォローアップしている教室として治療体制の充実に力を入れている」と椎名教授は話す。

2. 教育

同教室では臨床や研究のみならず、教育にも力を入れ

次世代の消化器内科医を育成している。医学生、研修医、医局員に対して十分な知識と経験を習得できる環境を提供しているのはもちろん、『RFAトレーニングプログラム』(写真1)などでは他施設医師にも門戸を開いている。これは、肝胆膵領域は内視鏡や超音波を使用したインターベンションなど技術的な側面を強くもつ領域であり、順天堂が中心となりその技術水準を全国的に高めていく必要があるという椎名教授の考えから企画されたものだ。

RFAは皮膚を2~3mmほど切除し、そこから電極針を病変に挿入して癌をピンポイントで焼き尽くす治療法だ。1ヵ所の焼灼時間は3~12分間、病変が大きければ電極針を何ヵ所かに挿入して全体を焼く。他の治療と比べると安全性は高いが、合併症が起こることもあれば、十分に焼灼できずに病巣の一部が残ってしまうこともある。

再発しても早くに見つければまた根治をめざせる機会が得られるが、病巣を高率に残存させる施設は再発を見つけ出す技術もまた低い。そうした状況を憂い、「施設間、医師間の技術格差をなくすことが目的」(椎名教授)と2013年から始めたのが、この『RFAトレーニングプログラム』だった。

トレーニングプログラムは2017年9月までに、国内版は10回開催され全国各地から170名の医師が受講し、国際版は4回開催され海外から49名の医師が参加している。

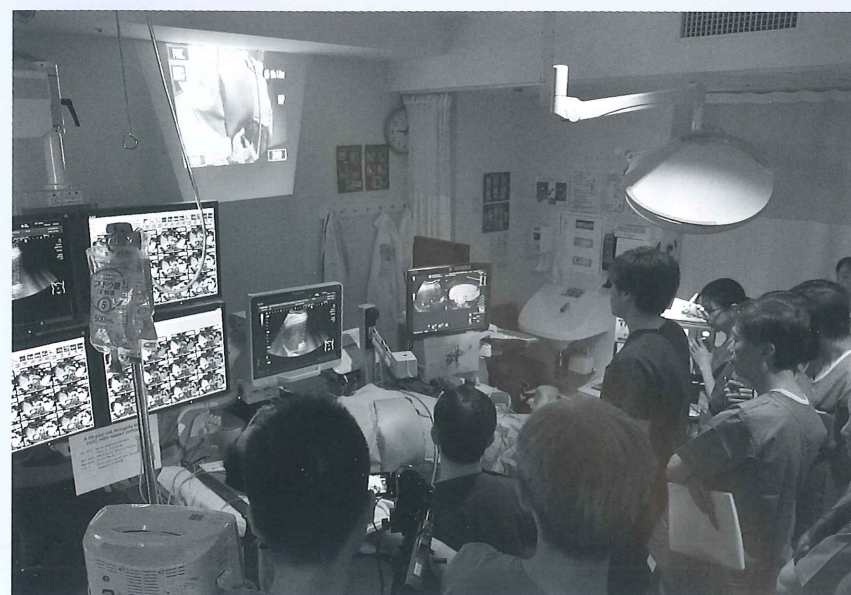


写真1 RFA トレーニングプログラムの様子

受講者らは椎名教授の手技を間近で見学し最先端のRFAがどのようなものを学習するだけでなく、肝癌治療に対する熱意“Shiina ism”に触れ、大きな刺激を受けて地元に戻っている。

順天堂大学大学院医学研究科 画像診断・治療学教室の肝癌診療の特徴 ~ラジオ波焼灼術(RFA)を中心に~

1. 教室におけるRFAの変遷

RFAは1999年に日本に本格導入され、現在までの症例数は日本が世界最多となっている。これほどまでに日本で普及した背景には、この治療に必要な技術が経皮的エタノール注入療法という肝癌の内科的治療ですでに確立しており、世界的に高水準であったことが関係しているといわれるが、そもそもこの経緯に大きく関わってきたのが椎名教授だ。

椎名教授は大学卒業後、三井記念病院で研修、当時始まったばかりの経皮的エタノール注入療法に取り組み、母校である東京大学に戻った後もその技術を高めていった。そして1995年、米国企業が開発したRFA機器に出会いその将来性を見抜き、米国企業と交渉、1999年から臨床に導入した。当初はRFAの治療効果を疑問視する

